

< 史料紹介 >

## ジョージ・ブレスウエイト書簡に見る日本平和会

坂 口 満 宏

Japan Peace Society seen through George Braithwaite's letters

< 解 説 >

本稿は、近代日本における「平和と仲裁」運動の基礎づくりに尽力したジョージ・ブレスウエイト (George Braithwaite) の活動について、その書簡を通して明らかにしようとするものである。

2005年に『近代日本「平和運動」資料集成』(不二出版)が刊行され、その第1巻に雑誌『平和』が復刻収録されたこともあって、日清戦争前後における非戦論、とりわけ日本平和会の存在が認知されるようになり、原田敬一『日清・日露戦争』(岩波新書、シリーズ日本近現代史③、2007年)や山室信一『憲法9条の思想水脈』(朝日新聞社、2007年)等において、その歴史的位置と限界が語られるようになってきた。こうした動きがあるものの、いまだに日本平和会に参加した会員たちの人物像はもとより、雑誌『平和』に収録された論説や雑報記事にわたる詳細な検討は手つかずのままといわねばならない。雑誌の復刻までは進んだものの、日本平和会に関する基礎的史実が確定していないことが精緻な検討を遅らせているのだろう。基本史料の整理が求められるゆえんである。

そこで本稿では、ジョージ・ブレスウエイト書簡のなかから、その「平和と仲裁」運動に言及するものを選び出し、紹介することとした。本史料が日清戦争前後の平和運動ならびに日本平和会研究に寄与できれば幸いである。

なお、ロンドンのクエーカー図書館 (Friends House Library) が所蔵するジョージ・ブレスウエイト書簡の概要とその資料的価値については、黒木章と尾西康充が詳しく触れている。詳細については以下を参照されたい。

- 黒木章「透谷がGeorge Braithwaiteに雇われた経緯とWilliam Jonesの平和講演会のこと」（『聖学院大学論叢』第16巻第1号、2003年、以下、黒木資料と略す）
- 尾西康充「北村透谷とG・ブレスウエイト—ロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から—」（北村透谷研究会編『北村透谷とは何か』、笠間書院、2004年。のちに尾西康充『北村透谷研究—〈内部生命〉と近代日本キリスト教—』双文社出版、2006年に収録される。以下、尾西論文と略す）

また、イギリスやアメリカの平和協会と日本との結びつきについては、下記の拙稿を参照していただきたい。

- 坂口満宏「雑誌『平和』をめぐる人々—「日本平和会」の新史料とともに—」（京都女子大学大学院文学研究科『研究紀要』史学編第5号、2006年、以下、坂口Aと略す）
- 坂口満宏「『懸賞問題答案平和雑誌』の原著 *Prize Peace Tracts for Young People*」（京都女子大学大学院文学研究科『研究紀要』史学編第6号、2007年3月、以下、坂口Bと略す）

なお、本稿に収録したジョージ・ブレスウエイト書簡のうち、史料18のみスワスモア大学ピースコレクションが所蔵するマイクロフィルム Wisbech Peace Association (DG 42) から採録したもので、それ以外はすべてロンドン・クエーカー図書館が所蔵するジョージ・ブレスウエイト文書 (TEMPS MSS 980、Box 6) から筆録したものである。紙数の都合ならびに論点を明示するという観点から、当該史料に前後する文面を大幅に割愛したのものもある。ご了解ねがいたい。

---

## 1、*Prize Peace Tracts for Young People* の翻訳と『懸賞問題答案平和雑誌』の出版

---

### 史料1 1888年9月12日付け 妹 Rachel 宛て書簡（抄録）

イギリスに住む妹のレイチェルに宛てたもので、*Prize Peace Tracts for Young People* の日本語訳の目的がたっていないことに言及している。

*Prize Peace Tracts for Young People*（以下 *Prize Peace Tracts* と略す）とは、イギリスの紅茶商のジョン・ホーニンマン (John Horniman) が、1883年の春、若者に平和問題について考えてもらいたいとの思いから懸

賞論文の募集を思い立ち、優秀な「答案」の印刷と配布を支援したことで刊行された12編からなる小冊子である。1886年5月に来日したジョージ・プレスウェイトは、イギリスで発行されていた *Prize Peace Tracts* 12冊を日本に持ち込み、早くから日本語に訳して出版する計画を立てていた。その様子については、ウイズビーチ地方平和協会の機関誌 *Peace and goodwill* 第2巻第10号（1888年7月\*）にも報じられていた。ところが日本人クリスチャンの岡田とともに始めた『リッチモンド信仰公示』（1887年アメリカのインディアナ州リッチモンドで開かれたフレンド万国大総会で採択されたもの）の日本語訳に、思いのほかでこずってしまったのだろう。*Prize Peace Tracts* の翻訳作業も遅延してしまい、刊行の見通しも立たなくなったようである。

\* 坂口B（8～9ページ）にて、*Peace and goodwill* 第2巻第10号の発行年月を1887年7月と記していたが、正しくは1888年7月であった。ここに訂正しておく。

#### 史料2 1889年1月7日付け 妹 Rachel 宛て書簡（抄録）

1888年11月21日付けで妹レイチェルから送られてきた手紙への返信である。これにより、レイチェルの手紙にロンドン平和協会から *Prize Peace Tracts* の印刷費として贈られた10ポンドの郵便為替が同封されていたことがわかる。しかし、レイチェルに返事を書いている時点においても未だ *Prize Peace Tracts* 日本語版出版の見通しは立っていなかったようである。

#### 史料3 1889年1月16日付け 妹 Rachel 宛て書簡（抄録）

*Prize Peace Tracts* の翻訳版である『懸賞問題答案平和雑誌』の印刷・販売をめぐり、日本人クリスチャンと交渉しはじめたことを記している。雑誌1冊の定価を1銭とすることやどれくらいの需要があるのか不明であるため、当面の印刷部数を1万部とするつもりであることを伝える。

なお、史料3からつぎの史料4の間に該当するもので、すでに黒木資料で紹介されているものに

1889年5月10日付け母宛書簡（黒木①資料）

1889年6月14日付け母宛書簡（黒木②資料）

1889年8月2日付け母宛書簡（黒木③資料）

がある。黒木①資料ではウイリス・ホイットニーとその妻メアリーの近況やジョージ・プレスウェイトの日光旅行のことなどが述べられている。黒木②資料にはウイリアム・ジョーンズの来日のことが記されており、黒木③資料には北村透谷がプレスウェイトの通訳として採用されたことが記されている。

史料4 1889年8月10日付け 母 Martha 宛て書簡（抄録）

ジョージ・プレスウェイトの招きで夏真っ盛りの日本に到着したロンドン平和協会の前書記ウイリアム・ジョーンズ（William Jones）夫妻の行動予定を母マーサに伝えるもの。これはすでに黒木④資料として紹介されているので抄録とした。

1889年8月5日東京に着いたジョーンズには、12日にフレンド教会の宣教師ジョセフ・コサンド（Joseph Cosand）とともに大隈重信外相を訪問し、その後、麹町の集会にて「平和と仲裁」について講演してもらうこと、そして19日には明治会堂で平和活動に関する講演をしてもらう予定であると記している。ウイリアム・ジョーンズの平和講演とその歴史的意義については坂口Aを参照されたい。

史料5 1889年8月21日付け Kittie 宛て書簡（抄録）

これも黒木⑤資料として知られているものだが、ウイリアム・ジョーンズによる平和講演のこと、北村透谷がその要旨を訳していること、来会者に『懸賞問題答案平和雑誌』を配布したところ好評であったこと、ジョーンズの来日を機に日本にも地方平和協会が発足したことを伝えるものであるため抄録した。宛先の Kittie は、ジョージ・プレスウェイトの妹だと思われるが、詳細は不明である。

史料6 1889年9月2日付け 妹 Rachel 宛て書簡（抄録）

同様にレイチェルに対しても、ジョーンズの講演後に『懸賞問題答案平和雑誌』を配布した、効果的であった、と伝えている。

---

## 2、日本平和会と雑誌『平和』に関する書簡

---

### 史料7 1889年11月22日付け 母 Martha 宛て書簡（抄録）

尾西康充氏が「北村透谷とG・ブレスウエイトーロンドン・クエーカー図書館所蔵資料から」の中で紹介していた書簡の一つである。ここでは、尾西氏のご好意のもと、氏が筆録されたものを採録した。母マーサ（Martha）に宛てたもので、日本にも平和協会が結成されたこと、ジョージ・ブレスウエイトがその書記に選ばれたことを記している。

なお、この書簡ならびに史料8、史料9の差出人住所表示は、51 Tsukiji. Tokyo（築地居留地51番地）となっている。

### 史料8 1890年6月8日付け 母 Martha 宛て書簡（抄録）

しかしその半年後、ジョージ・ブレスウエイトは日本平和会の書記を退任し、日本人に譲ったという。その理由をジョージ・ブレスウエイトは、これまで以上に本業であるキリスト教書籍の行商販売に力を投じるつもりなので平和会の活動に参加できなくなるためとしていた。

### 史料9 1891年1月19日付け 妹 Rachel 宛て書簡（抄録）

これによって、ジョージ・ブレスウエイトがプリシラ・ベックオーバーに宛てて日本の平和協会員たちが平和雑誌の発行を熱望している旨の手紙を書いていたこと、そしてレイチェルにはもし手元に20ポンドあれば、雑誌を創刊できるし、その後は自力でやっていけるようになるだろうと述べていたことがわかる。ジョージ・ブレスウエイトがベックオーバーに宛てたという手紙を見出していないが、時期からみるに *Peace and goodwill* 第3巻第5号（1891年4月15日）に掲載された“The Peace Society in Japan : Urgent Need for a Magazine to Set Forth Peace Principles”が、その手紙の主要部分だとおもわれる（坂口A、14～15ページ参照）。

本史料の後半では、手元に大量に残っている小冊子版の『懸賞問題答案平和雑誌』を合冊版とし、これまでの印刷経費の半分でも回収したい旨を認めている。そうした思いから出来上がったのが『平和問題答案平和雑誌 全』（明治24年5月30日出版）だったということになる。

**史料10 1891年7月28日付け 姉 Carrie 宛て書簡（抄録）**

ウイリス・N・ホイットニー（Willis Norton Whitney）と結婚した姉のメアリ（Mary）に宛てたもので、翌月にも日本平和会の雑誌が発行されることになっており、平和会の会員たちがイギリスの平和協会の組織について何かしら雑誌に書き込みたいと切望している、については関係資料があれば教えてほしい、と伝えている。

なお、ジョージ・ブレスウエイトは、1891年4月1日に築地居留地51番地から横浜の居留地に転居していた。そのため発信人の住所表記も14 Bluff, Yokohama（横浜山手14番地）となっている。

**史料11 1891年9月8日付け 母 Martha 宛て書簡（抄録）**

母マーサから *Prize Peace Tract* の日本語版を原著の出資者であるジョン・ホーニマンに送ってはどうかいってきたので、それに同意するもの。2007年9月、私はロンドンにあるホーニマン博物館の資料室を訪問し、関係文献の所在を問い合わせしてみたが、類書も見出せなかった。

**史料12 1892年2月25日付け 母 Martha 宛て書簡（抄録）**

雑誌『平和』の出版資金としてフィラデルフィアから100ドルの寄付があり、すでに受け取っているものと合わせれば300円近くになり、きわめて十分な額になったと知らせるもの。この書簡については尾西論文がいち早く紹介し、拙稿Aもそれに依拠していたが、「合わせれば3,000円近くに上り」と記していた箇所は、「300円近く」に訂正しなければならない。

**史料13 1893年12月4日付け Priscilla. H. Peckover 宛て書簡**

イギリスに帰国中のジョージ・ブレスウエイトがウイズビーチに住むプリシラ・ペックオーバーに宛てたもの。日本人に任せた雑誌『平和』の出版活動が停滞していることを嘆くとともに、雑誌が自然と消えていくことが最も望ましく、ジョージ・ブレスウエイトは日本に戻ってから、自らの手で再スタートさせる手はずをとるともりだと述べている。また、*Prize Peace Tracts* の翻訳版については、わずかながら売れているが、未だに多くが手元に残っているとし、日本人に平和運動の意味を知らせるには「イワン・イリツチの死」などトルストイの作品が適しており、べ

ルタ・フォン・ズットナーの小説『武器を取めよ』*Lay down your arms* もまた有益だとしている。そして末尾に「興味があるでしょう」としてベックオーバーに雑誌『平和』を数部送ることを追記している。

2007年9月、私は「もしかすれば雑誌『平和』の1号、2号を見つけだすことができるかもしれない」というかすかな望みをいただき、ウイズビーチを訪れた。ウイズビーチ図書館の地方史担当者やベックオーバー関係資料を整理してきた人たちから話を聞くことはできたが、ベックオーバー関係資料のなかに類書は残されていなかったようである。

#### 史料14 1893年12月20日付け Rebecca W. Cadbury宛て書簡

レベッカW. カドベリー（1849-1908）は、フィラデルフィア郊外のジャーマンタウンに住んでいたクエーカーで、アメリカ側の平和運動支援者のひとりである。ハバフォード大学スペシャルコレクションが所蔵するJones-Cadbury Family PapersにレベッカW. カドベリーの名が出てくるが、詳細は不明である。

史料13と同様に日本人による雑誌『平和』への取り組みが停滞していることを述べ、翌年、日本に戻ったらジョージ・プレスウェイト自身で雑誌活動を再開し、さらなるステップへと進める希望であることを伝えている。

### 3、日清戦争勃発後のジョージ・プレスウェイトによる平和雑誌出版活動

#### 史料15 1894年11月21日付け 石井十次 宛て書簡（抄録）

1894年7月、日清戦争が勃発したが、それ以前に日本平和会の活動は休止状態になっていた。雑誌『平和』も1893年5月3日に発行された第12号以降の存在は確認されていない。史料15は、石井十次からの問い合わせに対する返信のなかで、日清戦争のさなかにジョージ・プレスウェイトが創設したThe Peace Society（大日本平和会）の取り組みについて述べるものである。『懸賞問題答案平和雑誌』を全国のキリスト教会や説教所それに衆議院議員に送ったこと、翌年1月から平和雑誌を創刊する予定で、石井十次にも寄稿の意思があるのなら喜んで受け入れる旨を綴っている。

**史料16 1895年1月31日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)**

平和雑誌第1号の印刷が完了したが、通信省からまだ郵送料割引の認可がでておらず、近日中に認可されることを希望としている。

ここにいう平和雑誌が『基督友会五十年史』(基督友会日本年会、1937年、67ページ)にいう『平和之使』なのだろう。

**史料17 1895年2月5日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)**

雑誌『平和之使』が創刊されたこと、2月20日頃には第2号が発行される旨を伝える。また、ジョージ・プレスウエイトによる運動として日本の陸・海軍の兵士たちならびに近衛兵たちに聖書を配ったことを伝え、日清戦争を正当化する日本人の中国認識について解説している。

**史料18 1895年3月27日付け Priscilla H. Peckover 宛て書簡**

すでに坂口Aで紹介した書簡だが、ジョージ・プレスウエイトによる日清戦争中の平和活動の実情を最も詳しく綴っていることから再録した。

その前半で、プレスウエイトは、日本のキリスト者たちが戦争に協力する献金活動を始めたことに疑問を感じ、今こそ何かをしなければならぬと思うようになったこと、『懸賞問題答案平和雑誌』と『聖書平和之教』を全国の教会に送ったこと、かつての日本平和会の会員に対してもう一度活動する意思があるか問い合わせたことなどを述べる。

そして後半では、新たに協力してくれた3人の日本人とともに雑誌を発行したが、時事問題とみなされる記事が掲載されているとして発行停止となったこと、再刊するためには保証金を納めなければならないが、今後雑誌の発行を継続していくうえでの見通しが持ちえず、多くをする気になれないと、苦しい胸のうちを告げている。

**史料19 1895年6月20日付け 父 Joseph Bevan Braithwaite 宛て書簡(抄録)**

父への返書において、同年6月中旬、ペックオーバーから届いた手紙のなかにジョージ・プレスウエイトが取り組んでいた大日本平和会のためにとして20ポンド同封されていたこと、そのことに対して感謝していること知らせている。

史料18の書簡を受け取ったペックオーバーとしては、気弱になったジョージ・プレスウエイトの立場を思い、財政的にも支援しようと思っ



たのだらう。20ポンド(およそ100円)の為替を送ってきたようである。ベックオーバーからの励ましに対してジョージ・ブレスウエイトがどのように応じたのかはわかっていない。

< 史料編 >

1、Prize Peace Tracts for Young People の翻訳と『懸賞問題答案平和雑誌』の出版

|     |              |               |      |
|-----|--------------|---------------|------|
| 史料1 | 1888年9月12日付け | 妹 Rachel 宛て書簡 | (抄録) |
|-----|--------------|---------------|------|

9 Hikawa Cho, Akasaka. Tokyo. 9 mo 12. 1888

My very dear Rachel

(中略)

I have not yet got to work at the prevision of the Japanese translation of that Peace Tract we have published but hope to do so the first opportunity. I have gone through the Richmond declaration of Faith once with Mr. Okada the Japanese Christian whom I got to help me and we have made a number of alterations; he is now occupied writing it out, embodying the corrections in the text, verifying the references and amending the constitution so as to make it read well in Japanese. I am afraid all this will take some time, but when finished we intend going through it again and when I hope we can have it printed.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 5, Friends House Library, London)

|     |             |               |      |
|-----|-------------|---------------|------|
| 史料2 | 1889年1月7日付け | 妹 Rachel 宛て書簡 | (抄録) |
|-----|-------------|---------------|------|

9 Hikawa Cho. Akasaka. Tokyo. 1mo. 7. 1889

My very dear Rachel

Many thanks for thine of the 21<sup>st</sup> of 11<sup>th</sup> moth received a few days since and for the P.O.O £10 enclosed in it for printing Peace Tracts. How very kind of the Peace Society to send so much. I hope it will do much good. I have not yet had time to arrange anything with the Christian bookseller who wished to sell them but I hope to do so soon. Every day here seems busier than the preceding one.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 1, Friends House Library, London)

史料3 1889年1月16日付け 妹 Rachel 宛て書簡 (抄録)

9 Hikawa Cho. Akasaka Tokyo. 1 mo. 16. 1889

My very dear Rachel

(中略)

This morning I had a talk with the Japanese Christian who wished to sell the Peace Tracts. He now seems to think the larger size preferable. He intends selling them at 1 sen each and will pay all expenses of advertising, carriage and himself and will pay 50 sen per 100. He hopes to be able to sell a good number and took 500 today to begin with. He intends applying to the government to license them and if they do it will make the sale of them less liable to be prevented by any of the provincial authorities. Under these circumstances he wishes that the remainder of the series be published by degrees, say one or two each month until completed. I therefore propose not to go forward printing the edition of 10,000 you kindly authorized at present but wait and see how the demand is and in the meantime gradually go forward preparing the remainder of the set and publish No 3 and 4 in say a month or six weeks. I hope you will approve of this.

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料 4 1889年 8月10日付け 母 Martha 宛て書簡 (黒木④資料と同じ、抄録)

50 Tsukiji Tokyo. 10. VIII. 89

My very dear Mother

It is so nice to think of Willis, Carrie and their children and Richard, Anna and Henrietta all with you in the dear old home. I enclosed a copy of the translation of last month report of the work at Mito as I think it may be of interest. It was written out by Mr Kitamura, the young man whom I have got to interpret for me in the other ways. I made some corrections but it is still not quite right. I think he will be a very great help to me, he has been a Christian about a year, and seems a nice young man.

W. Jones and his wife reached here last 2<sup>nd</sup> day, they are both of them feeling the heat very much and wish to get away to the mountains as soon as possible, but cannot do so till they have made arrangements about seeing the various members of the Government whom they have come to see. Today is Monthly Meeting and W. Jones expects to attend and then tomorrow he hopes to attend the morning meeting in Ginza, and the afternoon meeting in the open air at Joseph Cosand's and then see the Minister for Foreign Affairs by appointment at ten o'clock on 2<sup>nd</sup> day morning, find out from him about the other minister and lecture in the evening on Arbitration at the meeting in Kojimachi.

I hope to get them to go to Nikko for a few days to see the temples there and interest the missionaries in the cause of peace. I also hope they will spend a few days at Mito and give some lectures there. Then last but by no means least I want W. Jones to give two or three lectures in the Meiji Kwaido, the large hall here. They wish to leave for San Francisco in about three weeks as they wish to attend some of the American Yearly Meeting so they have not much time to spare, however I hope with care they may be able to accomplish all. I am rather sorry they have come just as it is such uncomfortable weather for going about and so many people are away, however in spite of that I hope they will be able to stir up some interest here and start a Peace Society that may continue to work after they have gone.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料5 1889年8月21日付け Kittie 宛て書簡 (黒木⑤資料と同じ、抄録)

50 Tsukiji Tokyo. 21 VIII. 89

My very dear Kittie

I ought to have written before this for thy birthday but have been prevented. Nothing of interest happens now Carrie and her babies are gone, they were nearly sure to furnish matter for at least one letter. It has been a wonderfully cool summer I think, the thermometer not over 95° in the house and that not for many days, as I write it is only 85°. I perspire freely as usual and the spotted and striped mosquitoes are very annoying but one gets used to them. Fleas abound but never bite me. W. Jones and his wife have been spending a short time here, they leave by the steamer that takes this. I have tried to persuade them to stay here a year or at any rate a few months but they are resolute.

(中略)

Kitamura San, the Japanese whom I recently got to help me seems much interested in Peace and has got notices about Mr. Jones or reports of his meeting or something or other inserted almost every day in the Mainichi Shimbun one of the leading newspapers here. Last 2<sup>nd</sup> 1 day we had a meeting in the Meiji Kwaido. The body of the hall was well filled and there were a good many in the gallery. It was a stormy evening or I expect there would have been more. Dr. MacDonald kindly took the chair and introduced Mr. Jones who spoke on his Personal Experiences in War Time. Mr. Ishimoto most kindly came from Hakone specially to interpret. The meeting lasted about two hours, for particulars of what he said I refer thee to the verbatim report sent to Rachel by this mail.

I would have sent it to thee but thought she was the most peaceable. I hope you may be able to read it, i.e. if you care to. Kitamura San is now

translating it for insertion in the Christian.

(中略)

At the close of the meeting at the Meiji Kwaido we distributed the Peace Tracts to those who were there, they were much appreciated as usual.

As a result of Mr. Jones's short visit a Local Peace Association has been formed here, there are only a few members yet but I hope it will spread and grow. Some time this week I hope if possible to get the members together, fix the rules, appoint a Secretary, get everything into working order and set the members to work I hope if possible to get the Japan Mail to insert the report of the meeting verbatim but I am afraid it may be too long. They have already twice inserted things about him that I sent.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

|                                    |
|------------------------------------|
| 史料6 1889年9月2日付け 妹 Rachel 宛て書簡 (抄録) |
|------------------------------------|

50 Tsukiji Tokyo. 9mo 2.1889

My very dear Rachel

(中略)

The Peace Tracts already published proved very useful while W. Jones was here, They were given out at the close of each of the meetings that were held.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

## 2、日本平和会と雑誌『平和』に関する書簡

史料7 1889年11月22日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

51 Tsukiji. Tokyo 11th. Month 22nd 1889

My very dear Mother

(中略)

I think you may be interested to hear that a Peace Society has been established here. I am sending Rachel a copy of the rules in English and Japanese as they may be of interest. Its starting is one of the results of William Jones' late visit. There are only a few members yet, but I think they will increase by degrees, I have been appointed secretary though I did all I could to get out of it.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料8 1890年6月8日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

51 Tsukiji. Tokyo. 6 mo. 8. 1890

My very dear Mother

(中略)

I have resigned the Secretaryship of the Peace Society here and a Japanese has been appointed in my place. I thought it better to resign as now that I expect to have to travel about so much superintending the colporteurs I felt I could not attend to the Peace Society too.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料9 1891年1月19日付け 妹 Rachel 宛て書簡 (抄録)

51 Tsukiji. Tokyo. 1st moth 19th 1891

My very dear Rachel

(中略)

By this mail I am writing to Priscilla Peckover about a Peace Magazine which the members of the Peace Society here are very anxious to see started. I think if there was £20 in hand it could be begun and I hope by the time that amount was spent, if not before, it would have become self-supporting.

(中略)

I am having a thousand copies of each of the twelve Prize Peace Tracts published in Japanese and intend binding the twelve up together. The other day I cut up two Japanese Bibles, cutting out the texts referring to Peace. These I am having a thousand copies printed of for the use of the Christians. Both this the Prize Peace Tracts I intend putting on sale and hope to get back at least half the expense of printing. The Japanese have been so terribly fond of fighting in the past that I do want them to learn the beauty and the glory of Peace.

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料10 1891年7月28日付け 姉 Carrie 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama 28. vii. 1891

My very dear Carrie

(中略)

P.S. Oh ! By the way I have forgotten or rather that is to say that I have only just remembered one of the principal things I wished to write to thee about and that was to ask thee if thou happened to have anywhere among thy numerous stores any account of the formation the Peace Society in England. The Peace Society here is to be begun very soon, the first number

is to be issued, I think, the beginning of next month and those interested are very anxious to put in something about the formation of the Peace Society in England.

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料11 1891年9月8日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama 8. IX. 1891

My very dear Mother

(中略)

I think thy suggestion about sending copies of the Japanese Peace Tracts to John Horniman a very good one. I intend sending them in a few days.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料12 1892年2月25日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama 25. ii 1892

My very dear Mother

(中略)

By the last mail I received a hundred dollars from Philadelphia towards the Peace Paper which I am wishing to start here, this with what I had before received makes up nearly three hundred yen which ought I think to be quite sufficient. I have for several months been trying to get the Japanese stirred up to begin it but as yet nothing has been done. I had another talk with some of them the other day and I hope that now they will really do something. They are so slow in moving.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)



史料13 1893年12月4日付け Priscilla. H. Peckover 宛て書簡

312 Camden Road, London N 4, XII. 1893

Dear Friend

P. H. Peckover

I have to thank thee for several letters and I feel I ought to have replied to them sooner. I was not at all well for some time before I left Japan and on the journey was laid up for several weeks at Baltimore and then when I did get home about the middle of the 8th month I found that the effort even of a little letter writing was too much so I had reluctantly to leave everything. Now however I am very glad to say that I am much better, in fact almost as well as ever. Thou will understand therefore why I have not written to thee more frequently.

I was much obliged for thy letter in reference to Mr. Revon who thou said had been appointed Professor of General Public Law and Comparative Legislation at the Tokyo University but I am sorry to say I did not meet him before I left Japan. I am now writing to my brother in law Dr. Whitney about him.

Thou also asked whether I even heard any more about the writer of the "Voice from Japan". After receiving his letter which by the way was sent to the American Legation and was handed to me by Dr. Whitney, I wrote to him in reference to Peace and Christianity and received a reply from him saying that though he approved of Peace he did not approve of Christianity. I have often wished to communicate with him since but have not been able to do so as the letters I wrote to him were returned through the Dead Letter Office, he having gone and left no address.

As to the Peace Paper for the starting of which thou so very kindly sent a contribution, the first number was published in March of last year and one number was published each month since for more than a year. At first three hundred copies were printed each month and later two hundred copies. I do not think more than fifty copies were sold each month, the others were distributed free. When I left Japan in June there was about

twenty pounds in hand remaining out of amount thou contributed and what was contributed by Friends in America. This amount I handed to Joseph Cosand and I hear by a recent letter from him that he was only expended about one pound since I left so there is still about nineteen pounds remaining on hand.

I have not had much time to devote to the magazine myself and for other reasons have left it almost entirely in hands of the Japanese, but I am very sorry to say that they have not taken it up or carried it on at all as heartily as I could have wished, they seem to feel that they are working for a cause in which it is almost hopeless to do much at present. On the whole I think it is best to let the magazine die a natural death and when I return to Japan next April or May I propose taking it entirely into my own hands and start it afresh or if it seems better them to make other arrangements I can do so. It seems as if at any rate at present the Japanese whom I know are not qualified to carry on the work themselves. Some have thought that it would perhaps be better not to have a magazine devoted wholly to Peace but one that advocated Temperance, Social Purity, etc etc as well as Peace. I do not know however how thou would feel about such a magazine and whether thou would be willing that the money now remaining on hand should be expended in this way and would thou be willing to contribute any further towards the support of such a paper. I saw Rebecca Cadbury in Germantown in July and she seemed to think that the Peace Association there would be willing to give another contribution towards doing whatever seemed best in Japan.

Thou also asked about the Illustrated Tract, whether they sold or were distributed. I suppose thou refers to the Prize Peace Tracts which I had translated and published in Japanese. There is a small sale for these but they sell slowly and many have given away; there are still a large number on hand.

I suppose thou has seen Count Tolstoy's book "Ivan Ilyich other tales,

some of the stories at the end seem to me rather specially adapted for the Japanese. Parts also of "Lay down your arms" would also be likely to be useful. Some of the other books thou mention would also doubtless be of service.

I am going to Leeds tomorrow and then on to some other places in the North and shall probably be away about ten days.

I hope to see thee before I leave for Japan and talk over the work with thee but do not yet know it can be arranged. When I do get back I hope to be able to take up the work with much more vigour, as it seems to me what the time has fully come for it.

I send thee a few copies of Peace Paper as they may interest thee.

With love I remain

Thy sincere friend

George Braithwaite

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 1, Friends House Library, London)

史料14 1893年12月20日付け Rebecca W. Cadbury 宛て書簡

312 Camden Road, London N 20, XII. 1893

Dear Friend

Rebecca W. Cadbury

I hope thou are quite well. It was very pleasant to meet thee in Germantown this summer and since then I have several times wished to write to thee but been prevented doing so till now.

We have been feeling my uncle George Gillett's death very much and his loss is also felt keenly by many who were associated with him in various branches of Christians work. The cause of Peace had a very warm place in his heart and he was thoroughly alive to the importance of using the Press as a means of educating Public Opinion. About five years since

he set on foot a Peace Paper called the "Messiah's Kingdom" to advocate the cause of Peace from Christian standpoint. This paper has been carried on ever since but my uncle's death makes it somewhat doubtful whether it can be continue it for another six months in the hope that before the end of that time some way may be found to provide for its further continuance. The net cost of the printing and publishing of the paper appears to be about £120 (One hundred and twenty pounds) a year but this cost would be reduced if an increased number of copies were subscribed for. The edition is done free. I send thee a few copies of the paper in case thou has not already seen it. Possibly thou may know of some who might be willing to become subscribers.

I think I told thee that before leaving Japan I had handed the balance of the Peace Money to Joseph Cosand and a few days since I had a letter from him saying that nothing had been done since I left. It seems to me that the best way to do is to leave it at present and then when I return to Japan as I quite hope to do some time next year I intend either to restart the paper or take some other steps to further the cause of Peace.

I enclosed a card and wish thee a very happy new year. May it indeed be a year of increased usefulness and added blessing.

With much love I remain

Thy friend sincerely

George Braithwaite

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 1, Friends House Library, London)

3、日清戦争勃発後のジョージ・ブレスウェイトによる平和雑誌出版活動

史料15 1894年11月21日付け 石井十次 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama 21. XI. 1894

My very dear Mr. Ishii

(中略)

I wrote at once on receipt of your letter to Sapporo to ask for information about the International Peace Society you asked me about but I have heard nothing yet. I found an old paper however stating that the head office was in Sapporo, I think most probably it has been passed out of existence before this. The Peace Society I am connected with goes forward slowly, we have sent copies of the Peace Tracts to all the churches and Preaching Places through the country and also one copy to each of the members of the Lower House in Parliament. Many replies have come, some very angry others thanking us warmly and expressing much interest. A few have become members and are I believe doing what they can to interest others in the case. We are intending to publish a monthly Peace Magazine from the first of next year, if you have time and feel inclined to write anything for it, it will be very acceptable; it will of course be published in Japanese.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 1, Friends House Library, London)

史料16 1895年1月31日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama, Japan 1 mo 31, 1895

My very dear Mother

(中略)

The first number of the Peace Magazine has been printed but we have

not yet received permission to send them through the post at the reduced rate, this however we hope to have in a few days.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料17 1895年2月5日付け 母 Martha 宛て書簡 (抄録)

14 Bluff, Yokohama, Japan 2 mo. 5. 1895

My very dear Mother

(中略)

The first number of the Peace Magazine has been published, I am sending Willie two or three copies of it by this mail; the second number is now being prepared and will probably be published about the 20<sup>th</sup>.

The distribution of Scriptures among the Japanese soldiers both in the Army and Navy is going forward and the Government and military and authorities are doing everything in their power to facilitate it. Twenty thousand gospels are to be distributed in Tokyo tomorrow and the day after to the soldiers belonging to the Imperial Guard. We are also preparing one hundred and twenty thousand others for distribution to the men in other regiments and the Navy but do not suppose it will be sufficient to meet the best advantage as no one can tell when the door may be shut. I believe one reason of the present feeling is that many of the Japanese are beginning to understand that the motives for the atrocities which the Chinese have committed whenever they had the opportunity during the present war are really to be found in the weakness of the Chinese philosophy. Another reason doubtless is the exemplary conduct of thou soldiers who are Christians, ready for any duty however hard or painful.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

史料18 1895年3月27日付け Priscilla H. Peckover 宛て書簡

14 Bluff, Yokohama 3 mo, 27th 1895

Dear Friend

Priscilla H. Peckover

I have been wishing to write to thee ever since I got back here last spring but not somehow found the opportunity.

I wanted to begin issuing the Peace Magazine again, keeping the work as much as possible in my own hands but from one cause or another I was obliged to put it off. Then when the present terrible war broke out it did not seem wise to try to do very much at least so thought some. When however a Society was formed among the Japanese Christians for collecting money towards the expenses of the war and representative were appointed to visit all the churches in the country and urge all the members to give as much as possible I felt it was quite time to do something. Some years since I had John Horniman's Prize Peace Tracts translated into Japanese, also a number of Texts referring to Peace (Published in America as Scripture Testimony Concerning Peace). I therefore had a number of these printed and sent copies to each Church and Preaching Place throughout the Empire. Six or seven hundred copies were thus distributed. Each package contained the twelve Prize Peace Tracts and also the Scripture Testimony Concerning Peace. I received a number of letters of thanks, some wrote saying they were much interested in the subject. I heard of others who were extremely angry. I know however that thou will be glad to hear the Society mentioned above found it necessary to change its programme and instead of collecting money to help forward the war turned its attention to collecting funds to help the sick and wounded and relieve the families of those who were called to serve. I do not know what occasioned this change but anyway it was cause for rejoicing. I also sent a bounded volume of the Peace Tracts to each of the members of the Lower House of Parliament.

Thou probably remembers that a Peace Society was established here among the Japanese in 1889 on the occasion of William Jones's visit. At

one time there were I believe nearly three hundred members but the work was left almost entirely to the Japanese and some of them not being very earnest the membership fell off till when I returned from England last year I found very few left. Most of these were only members in name and so when the war broke out and the testing time came they were unable to stand. There seemed no other way therefore but to make a fresh start. I had a fresh edition of the rules printed in Japanese last autumn, also in English and sent a copy to each of the old members with a letter asking them to let me know whether they wished to continue. They all declined. Three new members however joined through the packages sent out to the churches and seen very earnest.

It seemed altogether as though it was really the best time to go forward and so after some difficulty the magazine was commenced again, two numbers were published and everything seemed going on well when suddenly the Japanese editor was called to the Government Office here and was informed that unless Two Hundred and Fifty Mexican Dollars (between £25 & £30) were at once deposited by him with the Government the magazine would be stopped.

In order to understand this action it is necessary that thou should know something of Japanese Publishing Regulations. All Publications that are issued periodically are divided into two classes, Scientific & Newspapers. We obtained leave for the Peace Paper under the head of Scientific and so were freed from the necessity of depositing money with the Government, at the same time however we were debarred from referring in any way to any current event either here or abroad. The Japanese editor does not seem fully to have understood this and so wrote an article about the late Emperor of Russia, another about Mr. Foster and inserted a letter from the Japanese commander at Port Arther to the Chinese Admiral, all very good from a Peace standpoint but unhappily sadly transgressing the regulations under which the publication of the paper was permitted by the Japanese authorities.

They have therefore decided to treat it as a newspaper. The daily newspapers mere have to deposit one thousand dollars, those that are



published weekly five hundred dollars and the other two hundred and fifty each. They are then free to publish articles of news and comment upon current events except in particular cases especially forbidden by Government as likely to endanger the Public Peace.

If the Peace Paper was able to be published under this regulation its usefulness would be much increased but I do not myself feel able to lay down the necessary amount. The Japanese editor is very much grieved to have it stopped but I told him there was no other way. He is waiting ready to begin again at once as soon as the way is made for him to do so. I have spent about thirty pounds in various ways in the cause of Peace since I came back and so do not feel able to do much at any rate at present. If the paper is begun again I should like it to be with a fair prospect of being continued in order to do this we ought to have at least £2.10 /-every month sure; this is not counting the amount mentioned above as being necessary for us to deposit with the Government before the Magazine can be issued but which would be refunded expenses we ceased publishing. I have written to Philadelphia about it and thought thou would also like to hear just how matters stood.

I send thee a few copies of the Magazine by this mail, also some copies of the Rules of the Peace Society here.

We had some membership cards printed sometime since I send thee one or two as thou may like to see them. The Chinese characters on the scroll in the dove's mouth stand for Peace; those in the top corners, the one for Love, the other for Righteousness; those in the bottom corners for Peace.

My brother in law Dr. Whitney left here with his family about a month since for England, they hoped to reach London about the 13<sup>th</sup> of next month. They only expect to stay a few months, their present intention being to get back here before the end of the year.

With much love

I remain

Thy friend sincerely

George Braithwaite

P.S. Thou may have heard of the Orphanage established here several years since on the lines of George Muller's St. Bristol. I send thee a little book published last autumn about it.

(Wisbech Peace Association,(DG 42), Microfilm ,Swarthmore College Peace Collection)

史料19 1895年6月20日付け 父 Joseph Bevan Braithwaite 宛て書簡(抄録)

14 Bluff. Yokohama, Japan 6 mo. 20. 1895

My very dear Father

It was very pleasant and indeed to hear so after from thee. I have just writing to Willis, will thou please tell him that I hope to send thee the mission monthly account by next mail.

Last first day a very kind letter came from Priscilla Peckover enclosing twenty pounds for the Peace Society work here, this is very kind of her.

(以下略)

(George Braithwaite Papers, TEMPS MSS 980 Box 6, Friends House Library, London)

---

本稿は、平成19年度ならびに平成20年度の京都女子大学研究経費助成「近代日本における『平和運動』の基礎的研究」による成果の一部である。